

AO入試による入学者の入学後成績と選抜方法

—選抜方法改善の観点から—

吉村 幸, 南部広孝

(長崎大学 アドミッションセンター)

長崎大学の3つの学部におけるAO入試による入学者の1年次の学業成績を2年度に渡って他の入試区分による入学者と比較し, その結果を各学部におけるAO1次選考の方法の違いという観点から解釈した。自己推薦書, 調査書, 課題論文などの選抜への貢献度合いを共分散比を用いて比較し, 何らかの客観的資料による評価を行なう方が好ましい学生を選抜できる可能性を示唆した。得られた結果をふまえ, どのような資料を選抜に用いるかだけでなく, それらがどのように選抜に寄与しているか, あるいはその信頼性や妥当性を詳細に検証することの重要性を指摘した。選抜に学部による志願者全体の質の違いや, 2次選考方法の詳細な比較検討が課題として残った。

1. はじめに

一般にAO入試では, 受験者を多面的総合的に評価選抜することを目指し, 自己推薦書や志望理由書, 活動報告書, 調査書などの書類審査, 小論文や課題論文, 面接, 実技など様々な尺度が用いられる。AO入試の具体的な方法は様々であり, AO入試を実施している大学はそれぞれ学生の追跡調査を行い学業成績やその他の特性を調べ, 選抜方法が妥当なものであるかの検証を試みている(大膳他, 2005; 黒田他, 2006; 大久保他, 2006; 大嶋他, 2005; 白川他, 2005; 渡辺他, 2005; 山岸他, 2006)。

吉村(2006)は, 特定の書類審査方法や面接方法がどのような性質を持つのか, どのようなことが起きているのかをデータに基づいて詳細に検討し, その結果を踏まえ書類審査や面接の具体的な手続きを洗練させることが重要であることを指摘した。AO入試で入学した学生の特性を把握することが大切なのは言うまでもないが, AO入試で用いられる種々の尺度の性質を把握し, 目的に応じたより適切なAO入試の方法を設計するという視点がなければ, 入学者選抜方法の改善は勘と

信念に基づく試行錯誤の域に留まらざるを得ない。

入学者選抜方法の改善の視点にはいくつかのレベルがある。1つ目は「制度」。例えば, 分離分割方式を採用するかその他の方式にするかといった事項を決定するレベルのことを指す。これは個々の大学で決定できる事項ではない。2つ目は「選抜方式」。これはAO入試を行なうか否か, 推薦入試を行なうか否かといった事項を決定するレベルのことを指し, 個別大学でかなりの程度自由に決定できる事項である。3つ目は「選抜方法」。これは何を選考資料とし, どのようなルールで採点・評価し, 選抜を行なうかといった事項を決定するレベルのことを指す。これは各個別大学で決定できる事項であり, 一般的には各募集単位での決定事項であると思われる。最も容易に社会に与える影響も少なく改善できるのは3つ目の「選抜方法」であることは言うまでもない。大所高所からの議論もそれなりに重要ではあるが, それが「選抜方法」レベルの具体的な改善を伴うものでなければ, あまり意味がない。

具体的な選抜方法の改善を目指すには、まずは選抜方法に関する知見の蓄積が重要である。

選抜方法に関する知見の蓄積とは、簡単に言えば「こうしたら、こうなった」の記録の積み重ねである。「こうしたら」と操作するものには、選抜資料と評価方法の2つがある。選抜資料に関して言えば、どのような選考資料にすればどのような志願者が集まるか、それは学部によってどのように異なるか、他大学の状況はどうか、どのような受験者層に影響するのかなどを観察し記録することが大事である。評価方法に関して言えば、どのように評価すればどのような学生を選抜することができるかの検証とその記録が大事である。言い換えれば目的に応じた適切なテストの開発を行なっていくべきであるということである。

本報告は、一般選抜の、AO入試、推薦入学を実施している複数の学部について入試区分による学業成績の比較を行い、その結果とそれぞれのAO入試の方法の違いを併せて検討することであるべき評価方法の方向性を探ろうとするものであり、不十分ではあるがその事例を紹介する。なお都合により年度並びに学部学科名を伏せる。

2. 200X年度、200Y年度入学生の1年次学業成績の入試区分による比較

図 1-a~3-b はそれぞれ A 学

部、B 学部、C 学部の 200X 年度と 200Y 年度入学生の 1 年次学業成績 (GPA) の入試区

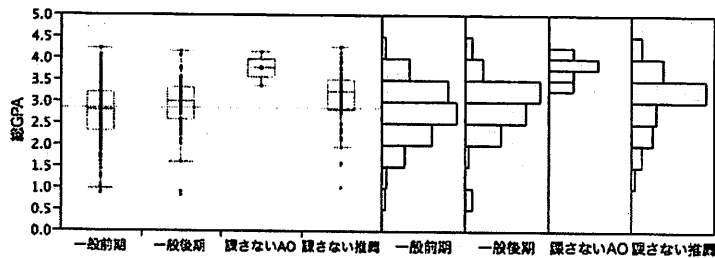


図 1-a A 学部 200X 年度入学生 1 年次成績

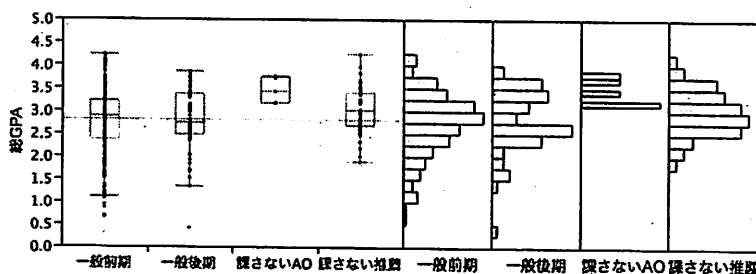


図 1-b A 学部 200Y 年度入学生 1 年次成績

分別の箱ヒゲ図並びにヒストグラムである。

A 学部と C 学部の入試は、一般選抜前期・後期、センター試験を課さない AO 入試、センター試験を課さない推薦の 4 種類であり、B 学部は一般選抜前期・後期、センター試験を課す AO 入試の 3 種類である。

図から、A 学部では両年度とも AO 入試による入学生の学業成績が優れていることが分かる。B 学部でも A 学部ほど顕著ではないが AO 入試による入学生の学業成績は両年度と

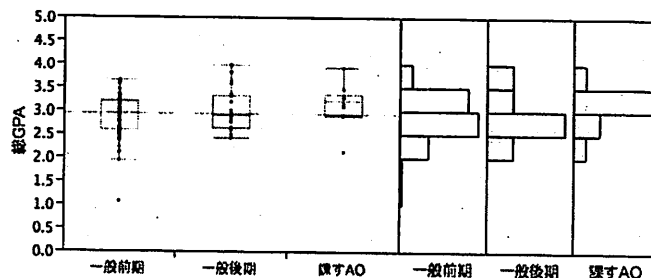


図 2-a B 学部 200X 年度入学生 1 年次成績

も他の入試区分による入学生の学業成績より優れていると言える。

これに対しC学部のAO入試による入学生の学業成績は他の入試区分による入学生と比べて良いとは言えない。

表1はそれぞれの学部のAO入試募集人員の学部定員に対する割合、志願倍率、1次選考倍率である。志願倍率を見る限りどの学部のAO入試への志願者も募集人員を遙かに上回るものであり、いわゆる「全入」のような選抜にならない状況ではない。この入学生選抜を評価するならば、入学後の学業成績について言えば、A、B学部のAO入試は選抜が「うまくいった」が、C学部ではA、B学部ほどは選抜が「うまくいかなかった」と言えるかもしれない。何がA、B学部のAO入試とC学部のAO入試の結果の違いをもたらしたのかその考えられる要因について以下に考察する。

3. AO入試における選考方法の比較

表2に各学部の選考方法を示した。どの学部も1次選考、2次選考からなる。1次選考は基本的に出願時に提出される書類による選考であるが、C学部だけは出願時の提出書類は誰が書いたか分からないからという理由から志願者を大学に集め課題論文を課している。

A学部の1次選考で課されている「諸活動の記録」は「高等学校時代に行った各種コンテスト・コンクール・競技会・懸賞論文等へ

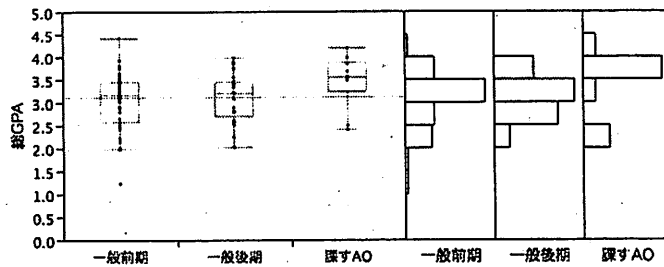


図2-b B学部200Y年度入学者1年次成績

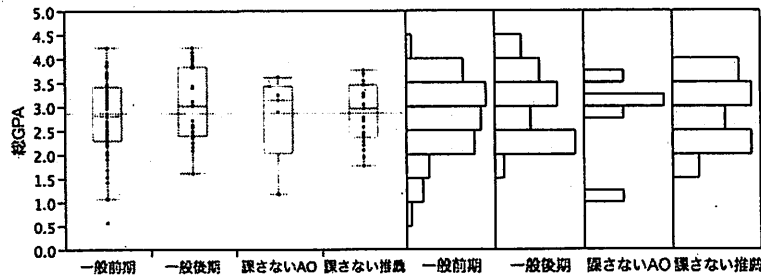


図3-a C学部200X年度入学者1年次成績

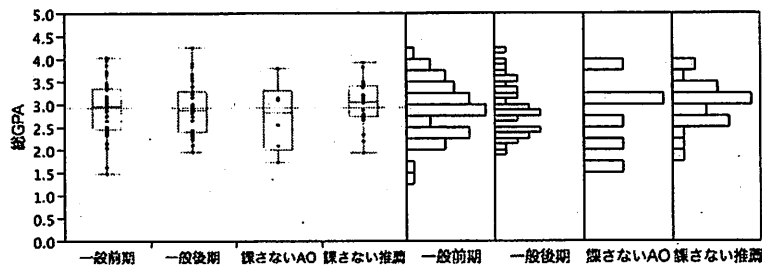


図3-b C学部200Y年度入学者1年次成績

の取り組みや資格の取得など」について評価を行うものである。A学部ではこの資料を一定のルールに基づいて点数化しており、他の選考資料に比べ客観性が高いという特徴がある。B学部には第2次選考にセンター試験を課しているという特徴がある。

表3に各学部における選考資料の共分散比並びに評定者間信頼性(Cronbachの α 係数)を示した。

例えば募集要項の記載されていることだけを見ればどの学部の選考方法も大した違いがない(少なくとも受験産業による「分析」で

は一括りにされる)。ところが、実際に何が行われているかまでデータを通して観察すると、ここで取り上げた学部の選考の実態はそれぞれ大きく異なるものであることが分かる。

A 学部では「諸活動の記録」が 1 次選考に最も寄与している。志願者の高等学校時代の業績は客観的な事実であり、これが比較的明確なルールに基づ

表 2 AO 入試選考資料 (学部別)

	A学部	B学部	C学部
1次選考 (書類選考)	自己推薦書 調査書 諸活動の記録	自己推薦書 調査書 諸活動の記録	自己推薦書 調査書 課題論文
2次選考	課題論文 面接	課題論文 面接 センター試験	面接

いて点数化されている。かなり客観的な選考が行われていると言
ってよい。ただし残念ながら事前に設定されている配点比は共分散比より遥かに小さいものであり、この結果は「計画通り」というものでは

表 3 AO1 次選考選考資料別共分散比、評定者間信頼性

学部	年度	共分散比			信頼性 (評定者間, α 係数)	
		自己推薦書	調査書	諸活動の記録 (課題論文)	自己推薦書	諸活動の記録 (課題論文)
A	X	0.26	0.28	0.46	0.788	-
	Y	0.23	0.34	0.43	0.792	-
B	X	0.18	0.82	-	0.850	-
	Y	0.23	0.77	-	0.737	-
C	X	0.05	0.04	0.91	0.922	0.856
	Y	0.28	0.10	0.62	0.917	0.755

ない。現状を意図的に保持できるようなルール化を試みる必要がある。

B 学部では比較的客観的な評価が容易な「調査書」の共分散比が大きく、主観的な評定による「自己推薦書」の共分散比が小さい。さらに B 学部では客観テストであるセンター試験を 2 次選考で課しており、B 学部の AO 入試による入学者選抜には主観的な評価が影響する余地はかなり小さいと言える。

C 学部では 1 次選考は課題論文だけで行われていると言っても過言ではない。課題論文の評定者間信頼性はそれほど低くないが、表 4 に示したように、調査書や自己推薦書との相関が年度によって大きく異なっ

表 1 AO 入試募集人員の募集人員全体に占める割合、志願倍率、1 次選考倍率 (学部、年度別)

学部	年度	定員に占める割合	志願倍率	1次倍率
A	X	1.4%	6.6	3.0
	Y	1.4%	4.0	1.8
B	X	10.1%	14.8	3.6
	Y	10.1%	16.2	3.6
C	X	4.5%	5.6	1.6
	Y	4.5%	9.4	2.9

いる。評価軸そのものが不安定である可能性が残る。

さらに、C 学部は 1 次選考の倍率が小さい。これはできるだけ多く 2 次選考に進めるためであり、「やはり面接をしなければ分からないから」というのがその理由である。しかし学業成績を見る限り「面接しても分からない」という可能性が強い。この点についての改善

表 4 選考資料の間の評価の相関

学部	年度	相関係数		
		資料	自己推薦書	調査書
A	X	調査書	0.711	-
		諸活動の記録	0.651	0.742
	Y	調査書	0.617	-
		諸活動の記録	0.776	0.693
B	X	調査書	0.282	-
	Y	調査書	0.409	-
C	X	調査書	0.518	-
		課題論文	-0.214	-0.063
	Y	調査書	0.539	-
		課題論文	0.524	0.421

の方向性としては、(1 次選考はある程度機能していると仮定して) 1 次選考の合格者を減らし、評定基準や観点を整備するなど面接の構造化を図ることが第一であろう。それでも

うまくいかない場合は、1次選考の課題論文の方法を見直す、あるいはA,B学部のように選考の客観性を高めるような工夫を試みる必要があるだろう。

これらの結果を総合的に考察すると、入学者選抜にあたっては、「自己推薦書」や「課題論文」などの主観的評価によらざるを得ない資料を用いるよりも、「調査書」や「諸活動の記録」、「センター試験」などの客観的評価が可能な資料を用いた方が好ましいと言えそうである。

4. おわりに

本稿では、AO入試を実施している全8学部の中から3つの学部を取り上げ、試験区分別に入学者の学業成績を比較しAO入試1次選考の分析結果と併せて解釈することで、ありうる改善の方向性を示した。ここで紹介した本学A学部及びB学部のAO入試は成功していると言えよう。しかし先に述べたようにそれは決して計画通りではなく「たまたま」という側面が強い。AO入試による入学者の追跡調査を行った結果、AO入試がうまくいっていると評価されても（あるいはされなくても）、具体的に何がどのようにうまくいっているのかを把握しておかなければ、例えば選抜資料の変更や採点者とその人数の変更があっただけでも選抜がうまく機能しなくなる可能性もある。ある選抜方法がうまくいく理由、うまくいかない理由を把握しそれを可能な限りコントロールすることで状況が変化しても適切な選抜を行うことが可能になると考えられる。

本報告で示した学業成績の比較結果については、「A、B学部のAO入試への志願者がすべて優秀でありどの志願者を入学させてもここで示すような結果になった。またC学部ではそもそも志願者の質に問題があり選抜自体は最善のものであった」と主張することも可能であるし、それを否定する根拠を示すことはできない。「入試」＝「いかに志願者を多く

集めるか」という昨今の風潮の中、本報告の内容は「些細なこと」と評されがちな話題である。もちろん、志願者の質をどうコントロールするかという議論が重要であることは疑う余地もない。しかし一方で、「有望な志願者を集めることに成功したのに、選抜に失敗した」という事態に陥らないためにもデータに基づく緻密な議論をおろそかにしてはならない。少なくとも「人物をみるには面接である」「マークシートで思考力がわかるはずがない」というような類の個人の信念や情緒に基づく議論は混乱以外の何ものももたらさないことを十分に認識し、議論の質の向上を図ることが必要である。入学者選抜方法の開発と改善は「本来」次のような道筋の中で進められるものと考えられる。例えばこうした筋道が入学者選抜方法研究における共通認識となれば個々の議論は互いにより有益なものとなるだろう。

0. 「制度」(=制約)を所与として、
1. 大学の教育理念に基づき教育課程を編成する。
2. 学修の前提となる態度、能力、スキル等の特性を具体的に特定する。
3. 特定された特性に基づき具体的なアドミッションポリシーを策定する。
4. 特定された特性の尺度を開発する。
5. 開発された尺度で受験生の特性を測定する。
6. 測定の結果に基づき選抜を行う。
7. 測定の信頼性と妥当性を検証する。
8. 特定された学修の前提の妥当性を検証し、見直しを行う。(2へ)

文 献

大膳司・岩田光晴(2005),「入試形態と入学後の学業成績・大学生活の関係-H大学の事例を参考に-」,大学入試研究ジャーナル, 15, 125-130.

- 黒田登美雄・岡崎威生 (2006), 「琉球大学における入学者選抜試験の追跡調査-入学試験の成績と休学者・除籍者・退学者の関係について-」, 大学入試研究ジャーナル, 16, 165-172.
- 大久保貢・郡司達夫 (2006), 「福井大学 AO 入試入学者の学業成績・学生生活」, 大学入試研究ジャーナル, 16, 71-76.
- 大嶋知之・内村浩 (2005), 「AO 入試における選抜制度の変更と入学者の基礎学力との関係」, 大学入試研究ジャーナル, 15, 105-110.
- 白川友紀・島田康行・渡邊公夫・山根一秀 (2005), 「筑波大学工学システム学類 AC 入試追跡調査-卒業までの 4 年間の総括-」, 大学入試研究ジャーナル, 15, 99-104.
- 渡辺哲司・武谷峻一 (2005), 「指導教員による九州大学 AO 選抜『一期生』の評価」, 大学入試研究ジャーナル, 15, 7-12.
- 山岸みどり・加茂直樹・鈴木誠・池田文人 (2006), 「北海道大学 AO 入試の追跡調査」, 大学入試研究ジャーナル, 16, 197-203.
- 吉村宰 (2006), 「長崎大学 AO 入試における書類選考データの分析」, 全国大学入学者選抜研究連絡協議会第 1 回大会研究発表予稿集, 33-36.

本研究は、長崎大学「新任教員の教育研究推進支援経費」の支援を受けた。

連絡先：吉村宰 (Osamu YOSHIMURA)

長崎大学 アドミッションセンター

〒852-8521 長崎市文教町 1-14

E-mail : osamu@nagasaki-u.ac.jp